

# V 先進校視察報告

愛知県立愛知商業高等学校 清林館高等学校

総括教諭 小関 秀寿

1 はじめに

都市部における地域との連携事業の実態を知ることと、最先端の機器設備を備えた校舎での授業作りを知るために今回の視察先を決定した。また、地域との関わり合いの中で、生徒がどのような成長を遂げていくのかに注目していきたい。

2 愛知県立愛知商業高等学校

2010年に生物多様性条約締約国会議(COP)が名古屋で開かれた際に、名古屋学院大学の水野教授と出会う。その出会いがきっかけで、愛知商業高校の様々な取組が加速していった。

まず初めに、校舎屋上で都市型養蜂から始まった。採れたはちみつ(徳川はちみつ)を使用した商品開発を地元企業と行い、売上の一部を東日本大震災の被災地への寄付やフェアトレードプレミアムとしてガーナの農業発展にも役立っている。そのような活動を授業(3年課題研究のマーケティング研究グループ)で行っていたが、業務拡大と教員の異動等に左右されない持続可能な取組のため部活動としてユネスコクラブを立ち上げる。そして、2013年にはユネスコスクールに認定される。その後の活動としては、旅行会社JTBに協力を仰ぎ、学校近隣の徳川園周辺の散策をツアー旅行として企画や、多くの企業から協力・支援を受け、商品開発及び販売実習も行っている。店舗での販売はイベント時だけでなく、常設販売もされている。販売企業として、イオン・ドンキホーテ・マックスバリュ等。販売商品は、紅茶、海苔、ジャム、つけもの等。売上や収益が目的ではなく、それ自体の取組が重要であるということを主に考えている姿勢が特に印象的であった。

これまでの取組を生かし、今回の地域との協働事業プロフェッショナル型に選定された。これまで行ってきた内容にプラスアルファの要素を組み込むために学年ごとにその取組を行っていく予定。

次のように現在検討中

- 1 学年：地域の課題発見→地域企業へ講演依頼。
- 2 学年：地域の課題解決→2学年全員にインターシップへ行かせる。
- 3 学年：地域ビジネス展開→ビジネス実践(協働的に取り組む)。

3 愛知県教育委員会

これまでの愛知商業高校とのやりとりを聞く。今の課題としては、全部で17団体にコンソーシアム参画をお願いしていて、7月からコンソーシアム会議を開く予定。年間3回を予定。カリキュラム開発等専門家には大学の教授をお願いしており、地域の協働事業に関心のある方で協力的な方を人選することができているようだ。

4 清林館高等学校

昨年度までに愛知県津島市に3カ所の校舎があったが、新たに隣接の愛西市に新校舎を構え、移転を終えたところであった。

まず、私立高校として働き方改革への対応に年度当初は悩まされたようだ。法人(企業)として扱われ、月の残業は、完全に月45時間・年360時間で収めないと罰則があるくらいの覚悟をもって学校として改革に取り組んでいた。出勤簿は印鑑では認められないので、勤務時間をPC上で管理しているようであった。残業はとにかくしないという工夫が見られた。

次に最先端ともいえる学校設備について、情報機器では移動式単焦点プロジェクターが各フロア(全3階建て)に5台ずつ設置してあり、職員室に40台あるタブレット式PCを教室に持ち込み授業で活用していた。もちろんWi-Fi環境は全館およびグラウンドにある。また、職員室前には課題提出ロッカーと返却ロッカーが設置してあり、本校でも試験後の廊下に並ぶ課題提出用ダンボール箱を解消できる手立てになりそうであった。

総合的な探究の時間は、昨年度より前倒しで行っていて1、2年で展開していた。ただし、今まで総合的な学習の時間で進路指導も行っていたので、総合的な学習の時間を平日に1コマ設置し、総合的な探究の時間は土曜に設置していた。1年生は本校同様にベネッセ社の探究ナビを使い、課題研究からスタートしている。本校と進み具合は同程度であった。2年生は、愛西市役所のバックアップもあり別紙のような地域課題をもとにグループに分かれて、探究活動を進めているようであった。

## 宮城県多賀城高等学校 ほか

教 頭 内藤 哲也  
総括教諭 住友 将勝

### 1 はじめに

訪問先の宮城県多賀城高等学校（県立）は災害科学科を設置し、防災教育を先進的に実践しており、本校の研究活動に資するところ大であると考え訪問した。

また、震災遺構を見学し、「私たちの仙台防災枠組講座シリーズ」に参加した。

### 2 宮城県多賀城高等学校の概要

宮城県多賀城高等学校は昭和 51 年 4 月に 8 学級規模普通科校として開校し、平成 17 年度入学生からは 1 学年 7 学級規模である。平成 28 年度に災害科学科設置。以来、災害科学科 1 学級、普通科 6 学級の定員 280 名となっている。また、平成 30 年度にSSHに指定されたほか、情報教育推進校（IEスクール、28・29 年度）の指定を受けるなど様々な指定を受けている。



同校は仙台市から見て東北の方角、多賀城市と塩竈市の市境付近に立地している。最寄り駅は仙石線下馬駅。生徒 800 人強の内、仙台市から 300 人ほど、多賀城市と塩竈市からあわせて 300 人ほどが通学している。男女はほぼ同数。国公立大学へ毎年 50 名弱が進学している。首都圏への進学は少ないが、災害科学科の生徒で、防災関係のことを学びたいと考え関西大学へ進学した者もあったとのことである。

災害科学科は今春第 1 期生を卒業させた。医師を目指す者、自衛官を目指す者、消防士を目指す者など進路は多様である。災害科学科は、過去に定員割れしたこともあったとのことであるが、本年度の入学生は特に意



識の高い者が集まっているとのことであった。

災害科学科設置の予算で大講義室（iRisHall）が平成 29 年度末に作られた。300 人ほどを収容できる階段教室でプロジェクター 2 画面が設置されている。2 本のマイクを近くで使ってもハウリングを起こさないなど音響効果も十分に配慮された素晴らしい施設で、授業だけでなく学年集会にも使用しているとのことである。

### 3 宮城県多賀城高等学校の教育課程

教育目標として、知性の伸長（さとく）人格の尊重（ゆたかに）心身の健康（たくましく）を掲げ、「21 世紀を担う人物を育成する」という観点で「社会、国家に貢献できる人物を育成する」という教育方針に基づき「多様な生徒一人ひとりが、生き生きとした学習活動を通して自己を形成し、進路目標を実現することを最大限に助長」する教育課程を編成している。

普通科においては、第 2 学年から文理の類型を置くほか、学校設定科目や科目横断型の選択科目を置いている。

災害科学科においては、「災害科学的知識に基づく課題解決能力の育成を目指し『専門科目』を 25 単位以上開設し、『普通教科』を組み合わせることで教育課程を編成する」とし、「専門科目」を以下のような能力及び資質の向上を目的として開設している。

- ① 事象を探究する活動を通して、科学的、数学的に考察し、処理する能力及び創造する能力を高める。
- ② 科学技術を社会の中で有効に役立たせるため、文化、歴史、哲学、心理学等の人間・社会科学的な視点を高める。
- ③ 防災・災害に関する理解を深め、実践的な活動を通し、災害に対応する能力を高める。

学年	科目	単位数	履修科目	単位数
1	国語	2	国語	2
	英語	2	英語	2
2	国語	2	国語	2
	英語	2	英語	2
3	国語	2	国語	2
	英語	2	英語	2
4	国語	2	国語	2
	英語	2	英語	2
5	国語	2	国語	2
	英語	2	英語	2
6	国語	2	国語	2
	英語	2	英語	2

学年	科目	単位数	履修科目	単位数
1	簿記	2	簿記	2
	英語	2	英語	2
2	簿記	2	簿記	2
	英語	2	英語	2
3	簿記	2	簿記	2
	英語	2	英語	2
4	簿記	2	簿記	2
	英語	2	英語	2
5	簿記	2	簿記	2
	英語	2	英語	2
6	簿記	2	簿記	2
	英語	2	英語	2



職員室には大型モニターがあり、職員の動静や来客を表示するなどしている。廊下に遠隔会議システムの機材が設置されており、神戸大学附属高校と常時接続されている。昼休みには会話を楽しんでいる姿が見られるとのことである。これとは別に1教室に同様の設備が設置されており、システムを活用した授業も展開されているとのことであった。

4 災害科学科、SSH指定ほかについて

東日本大震災後、平成23年の宮城県教育復興懇話会からの提言を受け、「人の命とくらしを守る人材の育成」を目指し、兵庫県立舞子高校の環境防災科に続く全国2校目の防災関係専門学科として災害科学科を開設した。

災害科学科には「自然科学と災害 A」「自然科学と災害 B」を設置し、それぞれ物理基礎と地学基礎、化学基礎と生物基礎の合科としている。また、「くらしと安全 A」を設置し、保健と家庭基礎の合科としている。合科の目的は、それぞれの科目の共通部分を二重に学習しなくて済むために確保できた時間を、災害科学科独特の学習内容に当てるため。教育課程特例校として認定を受けている。「くらしと安全 A」については、4単位を1年と2年での2単位ずつの分割履修とし、1年は家庭科の教員、2年は保健体育科の教員が担当している。情報科も「情報と災害」という学校設定科目とし、「くらしと安全 A」同様1年と2年の分割履修としている。「くらしと安全 A」「情報と災害」の扱いは、普通科も同様である。

SSH指定は平成30年度から令和4年度までの5年間。災害科学科設置の際に得られた予算が2年目、3年目と徐々に減額されているなか、SSHで得られる予算を有効に使えたとのことであった。しかし、SSHも第2年度は初年度比300万円程度の減額があり、派遣したい生徒実習の規模や回数を縮小せざるを得なくなっているとのことであった。

同校の取り組みの中で、多数の外部団体との協働が行われている。写真の仮設トイレ「ほほ紙トイレ」は企業からの寄贈を受けたものであり、組み立て実習も行っているほか実際に備蓄しているとのこと。備蓄食料の寄贈も受けており、文化祭等で試食をすることもあるとのこと。また、文化祭入場者による防災訓練の際には多賀城駐屯地の自衛隊が炊き出しをしてくれたとのことであった。

5 災害科学科浦戸巡検について



教頭は、早朝出発し、災害科学科1学年の「浦戸巡検」に一部同行させていただいた。

浦戸巡検は「露頭見学や試料採取といった野外実



習を通して、各分野の観察・調査の基礎を学びながら、現在の地球環境を理解する」ことを目的とし、例年1学年を対象に行っている。今回の引率者は小野主幹教諭以下7名。参加生徒数は40名であった。



事前事後の指導として、国立研究開発法人海洋研究開発機構海域地震火山部門地震津波予測研究開発センター地震津波モニタリング研究グループ技術研究員の今井健太郎氏に計3単位時間分の講義を依頼している。同法人に協力依頼している学校は多数あるが、継続して支援を受けられている学校は少ないとのこと。多賀城高校は、同法人に実施を任せきりにするのではなく、全体のカリキュラムの中に適切に位置づけているからであると、巡検中に同校教員から説明を受けた。

生徒集合は9時。開講式の後、9時30分出航の船で浦戸諸島に向かう。浦戸諸島では、「化学班」「生物班」「地学班」に分かれ、それぞれテーマに沿って学習活動を行う。船上では、班の別に関わりなく、防潮堤についての解説が行われるほか、巡検冊子にも詳しく解説されていた。

例年、北海道室蘭栄高校の生徒がこの巡検に同行していたのだが、両校の学校行事の関係で調整がつかず、今年は別日程での実施となったとのこと。多賀城高等学校の代表生徒数名も室蘭栄高校の有珠山実習に参加するため北海道まで毎年行っているとのことである。

## 6 震災遺構見学報告

9月28日(土)の午前中、住友総括教諭は震災遺構仙台市立荒浜小学校を見学した。仙台駅から地下鉄東

西線に乗り荒井駅で下車、バスに乗り換え10分ほどで終点の「旧荒浜小学校」バス停に到着した。周りに建物らしきものは他になく、かさ上げ道路の工事車両と「ありがとう荒浜小学校」という横断幕のある震災遺構となった荒浜小学校があるだけである。

荒浜地区は、仙台市中心部から東に約10km離れた太平洋沿岸部に位置している。海岸線に沿うように運河が流れその周辺に約800世帯、2,200人の人々が暮らす集落があった。1873(明治6)年創立の荒浜小学校は、海岸から約700m内陸に位置し、震災当時は91人の児童が通っていた。

2011年3月11日に発生した東日本大震災において、児童や教職員、住民ら320人が避難し、2階まで津波が押し寄せた荒浜小学校。津波による犠牲を再び出さないため、その校舎を震災遺構として公開し、津波の脅威や教訓を後世に伝えている。

校舎4階展示室「3.11 荒浜の記憶」では、14時46分の地震発生から、27時間後の避難者全員の救出までを、当時の校長や町内会長などへのインタビュー、消防ヘリの映像などを交えて振り返るとともに、災害への備えについて学ぶことができた。



## 7 「基礎から学ぶ仙台防災枠組」

～ 仙台防災枠組ってなに? ～

住友総括教諭は、震災遺構見学に引き続き、9月28日(土)14:00から仙台市青葉区にある仙台一番町ホールにて開催された「私たちの仙台防災枠組講座シリーズ」に参加した。100名定員の会議室に約30名ほどの参加者が集まり、講義・事例発表の後に質疑応答と話し合いが行われた。

講師は東北大学災害科学国際研究所の今村文彦所長、

准教授の泉貴子氏。まず、今村氏は2015年3月に仙台市で開催された国連防災世界会議で新たな国際的な防災の取組指針として「仙台防災枠組 2015-2030」が採択され、知らない担当者や専門家はいないにもかかわらず、市民レベルでの認知がまだ高くはないということに触れ、枠組の概要、いつ、どこで、なぜ、誰が、何のために作成したのか、どう役に立つのか、そして多文化防災の必要性について分かりやすく説明された。また、泉氏は枠組のガイドラインをもとに、どのような要素を従来の防災対策に追加するべきかを「兵庫行動枠組」から「仙台防災枠組」への課題として説明された。これらの講義を通して印象に残ったことは、あらゆるステークホルダー（様々な人たち、特に女性、子ども、高齢者、身障者、外国人）が防災活動に意見を言え、情報を共有できる場づくりが大切なこと。そして仙台の女性防災リーダーの事例発表では、より良い復興（ビルド・バック・ベター）を可能にするための備えとして地域と学校とのコミュニケーション（顔の見える関係）の必要性や、防災が普段の生活、日常そのものになる体制作りの重要性が語られた。

#### 8 学校訪問、研修会、見学を終えて

今回の訪問校である多賀城高等学校は、発災後のことを中心に据えた兵庫県立舞子高校とは違い、発災前に重み付けをしている全国の防災・減災学習のピロットスクールである。災害科学科の開設にあたっては多くの専門科目を開設しているが、進学型教育課程を編成し、ICTを活用した魅力ある授業展開や自学する「学び処」の設置など、まさに先を見据えた指導を行っていることが印象に残った。また、大講義室 iRis Hall などの素晴らしい設備は、まさしく「ビルド・バック・ベター」の一つであるといえよう。

研修会では市民レベルでの情報の共有化とより多くの人の枠組への参加が重要であることは分かったが、防災を日常のものとする主体的な活動の難しさを感じた。

また、短い時間だが震災遺構を訪れ被災当時のまま残された校舎と4階の教室に残る板書の文字や掲示物に被災前の普段と変わらない生徒たちの様子を垣間見た時には胸が熱くなったのを覚えている。今後の探究活動の動機づけにもつながる貴重な経験であった。

## 愛媛・岡山方面視察

総括教諭 小関 秀寿

教諭 小川 牧子

教諭 山内 未来

### 1 はじめに

地域との連携を土台に地域課題をSDGsの視点で考え、これまでとこれからの、研究の概要とその後の成果等について学ぶ。また、カリキュラム(学校設定科目や特色ある授業)や、組織(教員および生徒)について、全国的にもその取組が注目されている学校を視察し、本校の活動に生かしていく。

### 2 愛媛県立三崎高等学校

三崎高校のある場所は、四国最西端佐田岬(さだみさき)近くにある場所で、佐田岬半島の先端に位置している。その「先端」というフレーズから、地域協働の最先端の取組が半島の先端で行われており、実際に非公式の部活として「せんたん部」が地域興し専門の部活動として活動していた。

<三崎高校の様々な活動や取組>

#### ・みさこうマルシェ

廃校になった建物を使って生徒プロデュースの出店が行われた。

#### ・カジュアルディ

月2回程度の私服登校。チャイムがならない。生徒の自主性と自立心の育成。

#### ・せんたんミーティング

高校生が地域で作るイベント。

#### ・みっちゃん大福

地元のお菓子屋さんと共同開発。

#### ・美咲輝ロード

正門に続く壁面に生徒の努力目標を掲示する。地域の人も見る。

昨年より始めた全国募集で集まる生徒や、通学困難生徒が寮に入り生活をしている。この寮も伊方町が全面バックアップで、保護者は月15,000円の負担で生徒に食事や宿舎を提供できている。また、通学に係るバス代の半額も伊方町がバックアップ。さらに入学支度金として、5万円の地域振興券も支給。町内唯一の高等学校を存続させる為に、塾、寮、バス代、入学支度金など、すべてを伊方町がサポートしている。県立学校ではあるが、町と連携した学校経営ができている。

### 3 愛媛県立北宇和高等学校

JR四国を走る予土線(よどせん)近永駅から歩いて3分の場所にある県立北宇和高校は、地域創生のアソシエイト校として北宇和郡の鬼北町(きほくちょう)とも連携し地域協働に力を入れている。ただ、実際には今年度より地域創生に深く関わり始めた点や、予土線が1時間に1本の運行や、学校設定科目を取り入れたいが教育課程をなかなか切り崩せない部分、生徒・教職員の地方創生に対する理解と協調性の乏しさ、少子化による学校存続の危機など、北宇和高校の課題が山北高校の課題と重なる部分がある。いくつかあり、お互いに情報交換をすることができた。

学校の特色として、普通科以外に農業科の設置があり、さらに農業科の中でI型(農作物管理コース)とII型(食品製造コース)に分かれていた。I型では吉田島高校のように作物の栽培を中心に行い地域に販売なども行っていた。II型では地域の特産品を作る授業もあり、今回は「特産品開発」という授業の見学をさせていただいた。生徒が、白あんと求肥をこねて大福を作る授業であった。3年生の授業ということもあり和菓子職人のような手つきで、紅葉型とハート型を作成していた。以前に職人からの手ほどきもあったようで食紅を使い色にも工夫が見られ、作成したものは家に持ち帰り家族に食べてもらったりもするようだ。

次に北宇和高校の目玉でもある馬術部で飼育する7頭の馬と、その馬小屋の見学をした。県下唯一の馬術部で、大会などでの活躍ももちろんあったが、町おこしにも一役かっていた。地域の方が散歩に来たときに見てもらったり、乗馬体験も行ったりしていた。

#### 4 愛媛県立小田高等学校

愛媛県の再編整備基準で、小規模な高校は3年連続で入学生が40人以下になった場合、分校化が検討され、小田高校はその基準に今年度該当してしまい、分校化が正式に決定した。しかしながら、地域創生に関わる内容は自治体の内子町と共に進んでいて次のような取組があった。

##### ・起業家教育

魅力化推進室が3年前に設置されたときの最初の取組。生徒に地域としてどのような取組が必要と考えられるかを町の人と共に議論する。

##### ・いこころ会議

地域の方々が主体となって、高校がどんな取組をしているのかを発信したり、逆に学校にしてほしいことを要望したりするなど、小田地区に高校を存続させるための意見を交換する。

##### ・学校設定教科 探究

地域の課題を見だし、情報を集め、自らテーマを設定して研究をする。

##### ・オダカン

オダカンファレンスの略。小田高生全員が一同に参加し、決められたテーマの下話し合いを行うグループディスカッション。

##### ・海外との遠隔授業

内子町の協力で、シリコンバレーとの遠隔授業。海外企業の視点を学習に取り入れた授業作り。

##### ・小田寮

教員が交代で宿直。月額26,700円。全国募集も実施。教員の負担軽減のため、これらの活動を支える地域の理解と協力体制も少しずつ整い始めている。

#### 5 愛媛県立川之江高等学校

規模が大きめの6クラス規模の高校で、45%程度の生徒が4年制大学に進学するが、就職する生徒も15%程度いて、規模的には山北高校の生徒と類似する進路選択のようだ。地域協働事業のほぼすべての取組を園部教頭先生が進めているようで、教頭として着任してから1年半の間で多くの企業に足を運び、川之江高校を変えたいことや、どのような事を地域が求めているのかを聞き回ったそうだ。次のような具体的な取組をお聞きした。

##### ・グローバル人材育成事業

スコットランドへ行き、大王製紙の製品をアピー

ルするなど。生徒は英語でのコミュニケーション能力アップが期待される。また、地元新聞等マスコミも大きく取り上げる。

##### ・川之江先輩塾

著名なOB、OGの講演を開く。さらに今後は、拡大して地元企業も巻き込み寄付金を募る。中学生が来るオープンスクールでは、卒業生に体験授業を企画してもらおう。

##### ・川之江高校の取組を冊子にまとめる

地元印刷企業にお願いして冊子を作成。

#### 6 岡山県立瀬戸高等学校

##### 6-1 瀬戸高校の概要

瀬戸高校は3学年13クラスで全校生徒数は約440名の普通科進学校である。瀬戸高校では総合的な探究の時間を軸に据えて6つの力(「見つける力」「受けとる力」「つながる力」「考える力」「伝える力」「より良くなる力とする力」)の育成を目指し、総合的な探究の時間を「ひたぶるタイム」と名付け、地域の課題を知り、その課題が学問や世界の課題にもつながっていることを自分事として捉える探究活動を行っている。

##### 6-2 瀬戸高校の探究活動の取り組み

1年次では「セト☆ラボ」という名称で、「未来をよりよくするために地域の課題を知る」ことを目的とし、地域の課題や魅力、今後の展望などフィールドワークを通して探究し、年度末には地域課題の解決方法などをポスターセッションで提案する。2年次では「S☆ラボ」という名称で、「2030年を見通した地域の課題について、学問分野、SDGsから何を考えるか、提案できるか」を目的とし、年度末にはKP法(紙芝居風プレゼンテーション)で発表している。生徒の具体的な取り組みとして、落ちた桃の活用方法を考えて生徒が複数の企業とコラボしてハンドクリームを作ったり、昨年の西日本豪雨の被害を受けて、日ごろからの防災啓発の重要性を考えると鷹取醤油とコラボして災害時に食べられる醤油あめを作ったり等があげられる。3年次では「D☆ラボ」という名称で、1年生や2年生での学びを卒業後の進路につなげる探究的な進路学習を展開しており、生徒自身の進路実現と結びつけながら志望理由書や自己推薦書を作成している。自信を持ってA0推薦入試に挑



戦し成果を上げた。

## 7 岡山県立和気閑谷高等学校

### 7-1 和気閑谷高校の概要

和気閑谷高校は岡山県の和気郡和気町に位置し、1学年3クラス規模の小さな学校で、学力は山北高校と同程度の水準である。3クラスのうち、2クラスは普通科で1クラスはキャリア探究科で構成されている。普通科は3クラス展開しており、少人数での学びを特徴としている。キャリア探究科は1クラス40名構成で、資格の取得や商業系の学びを目玉としている。生徒の進学先は、大学が約3割、その他の専門学校などが約3割、就職が約3割であり、9年連続の就職内定率100%の実績を誇っている。

学習面の特徴としては、論語教育が挙げられる。毎朝のSHRで生徒が生徒手帳に記載されている論語を朗読する。また、生徒が地域の小・中学校で論語の授業を行う等の取り組みもある。1・2年生は全員がiPadを持っており授業内外で調べ学習やeポートフォリオの作成に活用している。

### 7-2 和気閑谷高校の探究活動の取り組み

和気閑谷高校は、部活動や文化祭、その他の行事や取り組みで以前から地域との連携に取り組んできた。今年度より山北高校と同じ文部科学省の「地域協働推進校」（地域魅力化型）に指定され、総合的な探究の時間において様々な活動を行っている。中でも、以下の取組や工夫が特徴的であった。

- ・学校として育てようとする生徒の資質・能力を7つ挙げており、それに基づいたルーブリック評価を取り入れている。
- ・「魅力化推進協議会」（コンソーシアム）の下に3つの部会を置き、取り組み内容の大枠を決めている。
- ・授業の詳細は、カリキュラム開発等専門家など3人の方の助言やアイデアを受けて決めている。
- ・カリキュラム開発等の専門家は、地域の中学校で非常勤講師や、地域おこし協力隊などの人脈をたどり人材を探した。
- ・閑谷学には、3年間の指導計画の中に進路学習も組み込まれている。

### 7-3 和気閑谷高校の探究活動における課題

探究活動の中で、SDGsの視点から地域の課題解決を提案することを2年次の課題の一つとして設定している。しかし、実際の授業とSDGsとの関連付けにはまだ課題が残る。

また、1年次は教員がある程度やることを示したりアドバイスや助言を密にしたりしながら進めている。2年次以降はできるだけ自主的に生徒が活動するよう意識して指導している。

## 8 学校訪問を終えて

3学年合わせて80人未満の小規模校だからこそできる取組から、1学年240人を動かす取組までやり方は様々だが、慎重になり過ぎずにまずはやってみるということを念頭に置き、取組を実践していきたい。人を動かす協働事業では、人と人との出逢いによって、人が変わり、地域の課題と魅力が分かり、結果としては地域も変わる。まずは学校と社会がつながり、次に生徒と社会がつながる。

以下が、今回の視察を通して学んだ取組の中で山北高校でも実践できそうなものである。

- ①地域の“すごい人”を見つけてカルチャースクール（ギター演奏、パン作り、釣り…）。
- ②廃校になった建物を使って生徒プロデュースの outlet。
- ③「カジュアルディ」月2回程度の私服登校。チャームがならない。
- ④山高ミーティング。高校生が地域で作るイベント。
- ⑤商品開発をする。地元のお菓子屋さんと共同開発。道の駅などで販売。
- ⑥「山高ロード」正門に続く壁面に生徒の努力目標を掲示する。
- ⑦東山北駅～山北駅～谷峨駅活性化プロジェクト。
- ⑧山北高校に地域の方を呼び、高校がどんな取組をしているのかを発信し、逆にどのようなことを学校にして欲しいのかを地域の方々と意見を交換する。
- ⑨アクティブラーニングの方法やICT機器の授業での使い方実践、研究授業の内容の周知など、生徒の地域創生に係わる授業の感想をまとめたプリントを配ったりして理解を得る。
- ⑩未来探究の授業で企業の方を講師として招く際の謝金等の代わりに、公演後に生徒の意見や考えの

感想文を渡す。

- ⑪多くの企業に足を運び、山北高校を変えたいことや、どのような事を地域が求めているのかを聞き回る。
- ⑫著名なOB、OGの講演を開く。中学生が来るオープンスクールで、卒業生に体験授業を企画してもらう。
- ⑬山北高校の取組を冊子にまとめる・・・地元印刷企業にお願いして冊子を作成。
- ⑭学校目標や教育目標を生徒にも分かりやすいように「〇〇の力」と表記し、総合的な探究の時間だけではなく、教科・学校行事においてもその「力」の育成を図る。
- ⑮学年を超えた交流・・・先輩が後輩に発表の指導をする。
- ⑯KP法やジグソー法等、多種多様な発表方法や思考を深める手法を用いる。
- ⑰未来探究の授業で、SDGsの各目標のカードを作り、活動の折々もしくは発表の際に、内容に関連すると思うSDGsの目標を生徒に考えさせ、関連性を説明させることで、授業をSDGsに関連付けていく。
- ⑱カリキュラム開発等専門家を町の学校の非常勤講師等から探し、授業の計画段階からアドバイスをもらう。
- ⑲学校として育てようとする生徒の資質・能力を整理する。そこから、未来探究で身に付けさせる力を整理する。